

西川 治著：地球人の地図思考 世界地図博物館創設を願って 暁印書館，2005年，337ページ，A5，定価：4,725円（税込み），ISBN4 87015 153 7

本書は，地図人生の還暦を迎えたとするほど長年地理学に携わり，日本地理学会会長，日本学会議会議員などを務め，多方面で活躍してこられた著者によるものである。副題に「世界地図博物館創設を願って」とあるように著者の願いが込められ，また人類にとっていかに地図が重要であるかを，長年培われた著者独自の思想に基づいて力説されている。

本書は，1985年以降に書かれ，機関誌・雑誌に掲載された論文やエッセイなどを中心に編集されたものとある。その構成は以下のとおりである。序章：地図人生の還暦を迎えて，第一章：人間と地図，第二章：地図は歴史の投影図，地図による歴史の発見，第三章：地図の開く世界観，第四章：地図で観るお国柄，第五章：世界の人口地図，第六章：国際時代の地図展と地図教育，第七章：地図のグローバルミュージアム，第八章：地球時代の地理情報科学，終章：限りある身は限りなき世に生きて，の以上である。

印象に残る部分を紹介したい。序章では著者の経歴とともに地理・地図と社会の関わり合いが紹介されている。通常あまり表に出てこない地図と行政・国策との関係，とくに第二次世界大戦前後から昭和の中葉までのそれが社会情勢とともに記述されており，貴重な記録である。第二～四章では，地図と歴史，地図史，地籍図，人類の地球観の変遷，ナショナルアトラスなどが，著者の経験や見解とともに述べられている。第五章では地図の話題とともに世界や各地の人口問題に言及されている。

グローバルミュージアムという語でタイトルされた第七章では，著者の最大の思い入れである「国立地図学博物館」への長い歴史の断面，すな

わち思い入れから，展望，現況が書かれている。ただ残念なことに，現況が示されていないがそれがどの時点（年）で書かれているかわかりにくい，様々な時点で書かれているものが混在しているようであった。

地理情報学というキーワードで位置づけられる第八章では，地球環境・環境変化を捉えるツールという観点から地理情報システム GIS について述べられている。具体的には，諸外国と日本における GIS の発展，日本における GIS 研究の流れ，またそれを支えた文部省科学研究費重点領域研究の計画，実施，反省が述べられている。そして，「国立地図学博物館」は難しいものの，東京大学に GIS の中核になるべき「東京大学空間情報科学研究センター」が創立された経緯が紹介されている。評者は地理出身であるが不勉強と年代の関係から GIS に関する系統的な教育を受けてなく，周囲で GIS を駆使する研究者に囲まれながらその歴史や最近の状況に疎い。そのような者にとっては GIS の誕生を知るよい機会であった。

本書には地図の歴史やそれに関わる人類の地球観の変遷などが記され，地図に関する記述もある。しかし，地図に関する解説書という位置づけは不適当と思える。地図に関する予備知識がある程度ないと読みにくいかもしれない。これまで地図に関心を持ち，数多くある地図に関する書籍を読みこなした，地図にある程度造詣の深い者に薦めたい。大多数の地図の本にも書かれていないことが所々記されていることに加えて，地図に対する奥深い哲学を含んでいるからでもある。一方で，相反するが評者の意見として，繰り返し述べられている「国立地図学博物館」設置，ならびに教育界における地理・地図教育の軽視とそれを許してきた日本の土壌への言及があることを踏まえれば，地理に携わる研究者・教育者に限らず，教育行政関係者にこそ幅広く一読してもらいたいものである。地図の恩恵を受けていながらその重要性に対して無意識になりがちな日本国内の現状がよく述べられているからである。

（鈴木毅彦）

新刊紹介

墓石部会地震調査研究会編：お墓と地震と地盤 被災墓地から学んだこと，墓石の振動実験から分かったこと，まだ分からないこと（実験映像DVD付） 日本石材産業協会，2006年9月25日，139ページ，A4，定価：10,000円（税込み）

岡田俊裕著：地理学者の戦時期著作目録 和田書房，2006年10月30日，331ページ，A5，定価：2,800円（税込み）

書籍紹介

山野明男著：日本干拓地 農林統計協会，2006年2月，227ページ，A5，定価：3,780円（税込み），ISBN4 541 03311 9

杵島正洋・松本直記・左巻健男著：新しい高校地学の教科書 講談社，2006年2月，365ページ，10 cm × 18 cm，定価：1,208円（税込み），ISBN4 06 257510 2